

家庭教育だより

53号

筆者 NP0 法人 sketch 倶楽部理事長 石垣 裕子

発行 白井市教育委員会生涯学習課 ☎401 8942

令和7年3月7日発行

「島」と「居場所」からみる家庭教育

変わる? 変わらない?



おぼろげな記憶なのですが小学校で習った日本の島の数が、自分の記憶と大きく変わっていて、最近ちょっと戸惑ったことがありました。

日本は島国と言われます。海岸線に浮かぶ島々を原風景のイメージに持つ方も少なくないと思います。ではその島の数はいくつあるのでしょうか?

この30年の間に「島の定義」はかなり変わり、昭和62年に6,852島であったものが令和5年には14,125島になりました。

私たちは、自分のまわりにある「定義」や「常識」は変わらないと思いがちですが、子どもの頃に学んだことが、月日の経過とともにすっかり変わっているということはたくさんあります。そこで自分の価値観や常識を絶対視せず、様々な情報をアップデートしていく柔軟性が問われていると実感しました。

子育てに通ずる島の守り

私は全国さまざまなまちの産業・地域活性化などに関心があります。

昨年、瀬戸内海のある島に行く機会がありました。島の暮らしもこの30年で大きく変わりました。より早く、より気軽に島へ出かけられるようになり、現在、その島は日常の喧騒を離れる隠れ家的な存在として人気を誇っています。しかし、便利になり得たものは多くありますが、失ったものもたくさんあります。

一方、伝統を守るため、親世代が築いてきた日常の島の暮らしを継承している例もあります。伝統的に醤油を製造してきた地域では、「木の桶」を用いた伝統的な製造手法にこだわる醤油醸造所を訪問しました。微生物により発酵する木桶仕込みの醤油は、衛生管理されたステンレス桶では実現できない風味豊かな深みのある味なのだそうです。手間暇かけた昔ながらの製法で作られた商品は数量も少なく、価格は割高です。

でも、その丁寧なこだわりこそ価値があるという造り手の思いに共感する消費者に購入されています。何を大切に守りたいか。その視点がまちを創り、人々のくらしが形成されます。島の伝統を守る人々の活動を通じて、子育てにも通じる視点ではないかと感じました。

本当の居場所ってなんだろう？

話は少し異なりますが、私は、柏市(委託事業)で「あ・えーるテラス」(障害者等自立支援室)の運営に関わっています。どなたでもふらっと立ち寄れ、交流できる、社会参加の入口になる居場所です。

「会える」「和える」「エール(応援)」という意味が込められていて、多様な人とつながる交流を中心にした安心安全な居場所です。

ただそこにいるだけで安心する。ありのままにいられる。居場所とはそんな場所です。居場所を機能的側面にとらえると、「休む」「楽しむ」「繋がる」ことができる場所です。

「休む」 体力・活力をチャージする。

「楽しむ」 意欲的に取り組み、満たされる経験値をあげる。今を感じる。過去を手放す。

「繋がる」 次のステップへの展望を描く。自分の意志で決定する。

しかし、社会課題として「社会的孤立」がフォーカスされるようになり、親を頼れない若者、居場所のない若者が20万人いるともいわれているのが現状です。

その人にとって、安心して休めたり、心身のバランスを保てる場所。家庭での食卓・対話の一つひとつが居場所としての意味のある構成要素。その空間でどれだけの時間、誰と過ごしたか。何気ない親子の時間はとても大切です。

「あ・えーるテラス」に来る若者が、「リビングのようだ」と言ってくれることがあります。まさに来所する理由がそこにあります。そして、ある時期が来ると、自ら社会参加の扉を開き、新しい世界を広げる方もいます。

本当の居場所とは、その人らしくいられる場所。

「いってらっしゃい」「おかえり」が合言葉です。



さいごに・・・。

島の定義がいつの間にか変化してしまったように、家庭の姿も変わりつつあります。大人たちが、子どもたちのためにできることは多岐にわたりますが、島に残された伝統のように、変わってはいけないものを大切に守っていくことや、子どもたちにとって本当の居場所となる家庭を創っていく。さらに次世代を担う子どもたちにプラスの遺産を残していくことこそが大切な使命であると、私は思います。大人が手を携えて子どもたちの未来を明るく照らしていきましょう。